

Title	油谷十二 片岡義雄著 会計学実務
Sub Title	
Author	山田, 正夫
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.12 (1928. 12) ,p.1813(165)- 1817(169)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19281201-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

もつと崇高な言葉で、この立場を表現すれば、それは一つの宗教をつくることである。

この意味に於て、「十九世紀科學的研究序論」の第二卷は、サン・シモンの要望する新宗教 *Physicisme* に對して、その最も根本的なものを明瞭にしたと云ふことが出來やう。

註一 *Saint-Simon, ibid. Intro. XXXI.*

註二 " *ibid.* " XXVI.

油谷十二 著 「會計學實務」
片岡義雄

山 田 正 夫

本書は前後三卷、本文二千二百餘頁に加ふるに凡そ二百頁に達する附録を包含する頗る老大なるものであるが、平易な解説は行文の平明と相俟つて讀者をして左程の倦怠を覺えしめないのみならず、會計學の參考書としては寧ろ肩の凝らない程度の氣樂さを以つて接することが出来るのは、恐らく油谷氏の口述筆記たるに依る意外の功名に歸すべきであらう。而して又本書の最も大きな特色とも云ふ可きは、『英米に學ぶこと十有餘年、其の間彼の地に於て會計、計算及び記帳の實務に従事し、……特に米國公認會計士及び米國會計士協會々員の諸氏に就いて直接に指導を受け、會計學と實務との關係を窺知するの機會を得、……又歸朝以來會計業務に従ひ』たりといふ油谷氏の貴重な經驗に基く該博なる實際的知識であらねばならぬ。従つて専ら計算記帳の實務に重きを置き、簿記係乃至會計士に對する實際上の注意を怠らざりし點に於て、本書は數多き我國の簿記會計書中に在つて最も異色あるもの、一たるを得ると同時に、就いて聽くべき部分の尠少に止まらざる好個の參考書として推すに足るものである。

今本書の内容を簡単に紹介するならば、先づ第一卷は之を「一般會計」と題して「單式簿記」と「複式簿記」との二篇に分ち簿記一般の説明を行ふと共に、帳簿の締切より順次資産の評價乃至損益計算書に關する解説等に及び一般に會計學の名を以つて呼ばるゝ分野を含ましむるのみならず、又卸制引及び現金割引、支拂期日平均、利息算並びに年金算の如き普通商業數學の中に於いて扱はるべ

項目をも取り入れて實務家としての素養に遺漏なからしめんことを期してゐる。

第二卷は「會計學實務」に屬し、第一卷の二編に次ぎ第三編合名及び合資會社、第四編株式會社、第五編株式合資會社の三編を收めてゐるが、その内容は管に記帳計算に關する説明のみに止まらず會社の設立より解散に至るまでの經營實務を詳細に亘つて縷述し、加ふるに各種書類の書式を、登記申請、定款等は元より、委任狀、各種證書、公告乃至廣告の様式から、場合に依つては印鑑又は戶籍謄本等に至るまでを一々擧示してある。かくて本卷は三卷を通じて最も大冊となり、稍もすれば實際に疎き傾向ある學習者に對して懇切なる實際資料を與ふるものであるけれども、此の周倒過ぎたる著者の婆心は一部の讀者には或は煩雜に過ぎるといふ感じを與へるかも知れない。とはいへ評者は此等の多くの資料蒐集に費された努力に敬意を表するに吝なるものではない。

「特殊會計」たる第三卷は、第六編特殊會計として特別仕譯帳と傳票臺帳組織、比較貸借對照表と比較損益勘定、グラフ、支店會計の諸章を設け、更に「原價計算」「破産會計」「和議會計」「稅務會計」の四編を加へてゐるが、破産會計以下の諸編の如きは未だ一般に參考文獻に乏しい様であるから此の點に於いても本書の貢獻する所はまた小にして止まるまい。猶ほ附録としては各卷に記帳例題を備へる外、關係法規を載せて讀者利用の便に供し、別に索引の設あること勿論である。

今茲に二々指摘してゐる暇はないが全體の講述の上には精粗煩簡甚だ宜しきを得ない部分も少くなく、ことに第一卷の全般に亘つては猶ほ説いて詳細を盡し得ざる數々の重要な事項が残されてゐる。又如何なる理由に依るか知らぬがこと更四六版を選んだが爲に組方に相當の苦心を拂つた様ではあるが未だ猶ほ帳簿の形式の非常に見悪い個所も少くない。けれども之等の欠點は最初記した様に徹頭徹尾實務的な説明と、上に述べた様な非常に浩瀚な内容とに依つてさして本書の特色を傷

けるものとも云へないかも知れず、又著者の希望する通り「青年が學窓を出で、實業界に入るの日、計理士として會計實務に掌はるの時、本書により幾分なりとも益する所」の必ずある可きことを認めて之を江湖に薦むるに憚らぬものではあるが、それにしても猶ほ一つの本書に對する不満、而も一層根本的な不満を評者は茲に默殺することは出来ない。成程著者が本書を「學問的の論文として公にするのではなく、……實務的の二書をものしたまでである。」と斷はつて居る意味も肯はれる。又本書に對して敢て著者の理論的立場の闡明を要求しようとは思はない。が併しながら著者が窺知し得たりと稱する「會計學と實務との關係」に關する見解とは一體如何なるものであらうか。凡そ會計學の如き實際的學問に於ては、學者の理論はやゝもすれば實務上の考慮を缺き徒らに理論の爲に理論を弄ぶものとして實際家に依つて擯斥せられ勝ちである。元より斯くの如き學問は實際を離れて存立すること能はず、又その學說が實務に依つて是正促進せしめらるべきは疑を存せぬ所であつて、其の點に於いて本書の著者が常に形式的なる在來の簿記會計書若しくは學校に於ける教授法を戒め、又例へば創立事務中に於ける今日一般の記帳手續は「會社帳簿に事實を現はさないものであつて、……帳簿を通じてその責任の歸屬するところが判然しないことになりはしまいか。徒らに泰西の亞流を汲む所謂簿記學者なるもの、一考を煩はしたいと思ふ。」といふ様な積極的提唱を爲してゐるが如きは、勿論注目に價することではあるけれども、更に之等の實際的見解の裏を一貫して其の總てを統一する根本原理がなければならぬ。茲にたとひ實務のみを問題とする場合に於ても必ず考慮の外に逸することの出来ない「會計學と實務との關係」が存するのである。かくて本書の著者が、或は複式簿記の原理を歴史的習慣に歸せしめて之に何等の理由なしと稱する一方貸借對照表の形式に一言の論及する所なきが如き、或は當然實務的見地よりして觀察せらるべき評價

論に案外特色ある見解を發見する能はざると同時に減價銷却に就いても只其の主要なる算定方法を列擧するに止まつて何等の批判的態度をも示さざるが如き、或は又複會計式貸借對照表の項に於て唯その形式のみを説明するに終始して詳細は讀者をして自ら三邊氏及び吉田氏の著書に求めしめんとするが如き、其他同様なる不滿の往々にして感ぜらるゝものあるは、果して著者に如何なる理論的根據ありやを疑はしむるに十分である。

併しながら學識經驗兩つながら深き著者が其の根柢を把握してゐないとは信ぜられぬ。恐らく本書に對する斯くの如き不滿は餘りにも強調せられた實務の見解の爲に只之を明瞭に察知する能はざるが故にのみ發するものであらう。而して又かくの如きは或は理論一方に偏せんとする世の學習者に與へんが爲の著者の故意に出でたことかも知れない。依つて今假りに一步を譲つて本書に對して些かたりとも著者の理論的見解の表明を要求しないことにしても、猶ほ且つ本書の有する全體系には俄かに賛同することを憚らねばならない。極めて部分的な例を擧げるならば第二編複式簿記の中に商業數學の一部を説き來る場合にしても、之を如何にして簿記の内に織り込み來る可きかといふことに就いては餘り考慮が拂はれてゐないのを惜む。私は決して商業數學を簿記の中にとり入れることを否定するものではなく、却つて豫てから著者と同樣の考を懷いてゐたので本書の企ては非常に興味を以て眺めることが出來たのであるが、それにしても此の事が商業數學の中から一章を取り來つて直ちに之を簿記の中の一章と置き直すことに依つて然く簡單に行はるゝものなるや否やに關しては些が異つた卑見を有するのである。若し夫れ會計學の全體系を如何に樹立すべきかの問題に至つては今茲に速決し去ることの出來ぬ大きな問題ではあるが、著者の體系概念には猶ほ大いに整理を要する部分、或は根本的な淘汰を求むべき餘地が十分に残つて居ることは疑ないことであつて、

而も此の一事はたとひ實務的見地のみを固持せしとの故を以つてしても、依然缺陷として止まるを免れぬであらう。

本書の表紙には外國語に依つて、而も殊更ら獨逸語を選んで *Buchhaltung und Betriebslehre* と記してあるが、本書の特色は實に此の二つの單語の併置に依つて最も良く代表されてゐる。が併し又其の内容は彼の理論を中心とする獨逸流のそれには非ずして實務を尊重する米國流のそれである。我國に行はるゝ會計學の著述が多く英獨の流儀を汲んでゐるに際して、本書の如き米國風の著書が出現したことは決して意義のないことではなかつた。その限りに於いては本書に於いて理論的根據が輕視せられてゐることも亦意義のないことではないのである。筆者の評論は寧ろ本書の批判に托して會計學に對する未熟なる私見の一端を洩らしたまでであつて、筆者の淺學なる、必ずや他日著者の高見に依つて啓發せらるべき機のおらんことを切望するものである。(第一卷四七二頁附錄六八頁索引二〇頁三圓五十錢昭和三年二月刊、第二卷一〇七二頁附錄五五頁索引二九頁五圓五十錢九月刊、第三卷六八四頁附錄七二頁索引二四頁三圓八十錢九月刊、各卷四六版布裝寶文館發行)